

# 主体的な学び の実現

新型コロナウイルスの感染拡大により全国の学校が臨時休業中だった2020年4月、小学校の新学習指導要領が全面实施された。その要諦となる「主体的・対話的で深い学び」をどのように実現していくか。同時期に開校した小中一貫校では、まず「課題発見」の能力の育成に力を入れ、子どもたちの主体性を育もうとしている。

実践校

## 小中一貫校 にじの丘学園 愛知県 瀬戸市立にじの丘小学校



校長  
**渡邊康雄**  
 わたなべ・やすお

主幹教諭  
**深谷大輔**  
 ふかや・だいすけ

### SCHOOL PROFILE

◎ 2020(令和2)年、5つの小学校と2つの中学校が統合し、施設一体型小中一貫校として開校。学園教育目標に「学び、つながり、挑戦する9年間」を掲げる。

校長 渡邊康雄先生

児童生徒数 約850人(学園全体)

学級数 33学級(学園全体。うち特別支援学級6)

電話 0561-56-2416(小学校)

URL <http://www.schoolweb.ne.jp/seto/nijinooka-ej/>

## 子ども自身による「課題発見」で、次の学習行動に必然性を持たせる

愛知県瀬戸市にあるにじの丘学園は、2020年4月、小学校5校と中学校2校が統合し、同市初の施設一体型小中一貫校として開校した。教育活動の軸に掲げるのは、「課題発見・協働・情報収集・対話・表現」の5つの力を合わせた「協働型課題解決能力」の育成だ(図)。にじの丘小学校の渡邊康雄校長は、そのねらいを次のように説明する。

「私たちが今、コロナ禍という先を見通せない問題の解決に取り組んでいるように、子どもたちも将来、今は予測もつかない問題と向き合うことになるでしょう。社会で生きていくために、また、自身の価値を高めるためにも、自ら課題を見だし、他者と協働しながら問題解決に取り組む能力が必須になると考えています」

その育成に向けて、9年間を見通した上で発達段階ごとの到達目標を設定。小学1～4年生は「学校生活や身の回りで起きた問題について話し合い、解決に取り組める」、小学5年生～中学1年生は「学校や地域にある課題を見だし、かかわり、解決できる」、中学2・3年生は、「国や社会にある課題を捉え、問題の解決策に導く」とし、小・中学校の全教員で共有している。

### ◎まずは「課題発見」に重点を置く

基本的には、単元や題材のまとまりごとに5つの力をそれぞれ実践する授業づくりを目指す。しかし今年度は、コロナ禍の影響もあり、5つの力の中でも「課題発見」に重点を置くことにした。主幹教諭の深谷大輔先生は、5つの

力からまず「課題発見」を選んだ理由を次のように語る。

「単元や各授業の導入時に子どもが自分で学習課題を設定できれば、その後の学習に主体的に取り組めます。知りたいことがあるから情報を集めようとし、コミュニケーションが生まれます。課題発見に力を入れることで、おのずと他の4つの力の育成にも結びつくと考えています」

深谷先生が授業を担当した小学5年生の社会科の「米作り」では、まず自分たちが食べている米の産地や食味ランキングを調べ、東北地方が有数な米の産地であることに着目させた。次にその理由を考えさせて、子どもから挙がった意見を「自然環境」「農家の工夫・努力」「農家以外の工夫・努力」に分類。実際の様子を知りたい気持ちにさせてから、グループに分かれて調べてまとめる学習を行った。

### ◎異学年合同の授業で、学習課題に必然性を生み出す

学習課題を設定する際の工夫の1つが、異学年での合同授業だ。例えば、英語で自己紹介や各国の紹介などを行う活動では、小学6年生と中学3年生が混合グループをつくって行った。6年生にとっては、上級生に自己紹介を、しかも英語でするのはハードルが高いが、それだけにどの子どもも一生懸命事前の準備に取り組む姿が見られた。

「情報発信の活動では、子どもがその必然性を感じることで、自分がよく知らない異学年と活動することで、何とか伝えようと様々に工夫します。同じ学年やクラスでは生じにくい必然性が生まれやすくなります」(深谷先生)



\*じの丘学園提供資料を基に編集部で作成。

## 小・中学校の教員同士が学び合い、指導力向上を図る

統合前の各校は小規模校で、各学年とも単学級であることが多かった。そのため、統合前の各校から来た教員の中には、学年団として複数の教員で意思統一を図り、指導の足並みをそろえることに慣れない様子も見られた。そこで、例えば中学校では、全員が必ず集まることができる授業の空き時間に学年会を設定している。また、学校全体の指導方針は、文書で共有するとともに、研修会などの機会に繰り返し発信して周知を図っている。

### ◎研究授業を小・中合同で実施

施設一体型小中一貫校の利点を生かし、算数や英語、体育などでは、中学校教員による小学校への乗り入れ授業を行っている。また、研究授業も小・中合同で実施する。

「学習内容に応じた指導の工夫は、どの学年のどの教科の授業を見ても自身の指導に参考になることがあります。小学校の教員にとっては、6年間の学習が中学校でどう活用されているのかを知る機会にもなります」(渡邊校長)

9月に行った中学校数学科の研究授業には、小学校教員も大勢参観。生徒同士の学び合いを中心とした授業に、小学校教員は大いに刺激を受けたという。

「中学生が楽しそうに数学の問題を解く姿に、『学ぶことは楽しい』と子どもが実感できるようにする重要性を、改めて感じたという声が多く聞かれました」(渡邊校長)

### ◎事後研修は、15分間のグループワーク

事後研修は15分間とし、参観者が数人ずつのグループ

をつくり、よかった点や気づいた点を1分間ずつ述べ合う。短時間だったが、教員には参加しやすいと好評だった。

「事後研修を長時間にすると、授業者の振り返りに始まり、参観者が1人ずつ感想を発表するなど、形式的になりがちです。短時間でも率直に気づきを述べ合う方が、発言のハードルが下がり、質問は個別に授業者に聞くことになれば、教員の主体的な学びの場となります」(深谷先生)

実際、前述の数学科の授業に刺激を受けた小学校教員が、中学校にならって授業に学び合いを取り入れたところ、想定通りに進まなかった。そこで、中学校教員に自分が担任をするクラスで授業をしてもらい、指導法を直接学んだ。

### ◎職員室のよい雰囲気が学び合う教員集団をつくる

教員同士の学び合いが活発化している背景には、職員室の雰囲気づくりがあると、渡邊校長は語る。

「職員室は小・中合同とし、中央に事務職員と用務員の席を設けています。業務上の動線への配慮もありますが、いつも職員室にいる職員の雰囲気が和やかなので、職員室全体が明るくなり、教員同士の会話も弾むようになります。そこからよい人間関係が築かれていきます」

今後は地域との交流を推進したいと、深谷先生は語る。「いろいろな年齢・立場の人と一緒に学ぶことで、子どもが得られる気づきも多様になり、その課題発見を起点として、学びが広がり、深まることが期待できます。子どもが主体性を発揮できる学びを今後も工夫していきます」